

小学校国語科において書くことの能力を高める 指導の在り方に関する研究

- 発表設計を支援するコンピュータ教材の開発をとおして -

雫石町立七ツ森小学校 教諭 笹川修一

研究目的

小学校国語科において高学年では、目的や意図に応じて筋道を立てて自分の考えたことを文章に書く能力と、効果的に表現しようとする態度を育てることが求められている。そのためには、目的や意図を明確にもって書く場面を設定し、表現の効果を確かめながら工夫させることが必要である。

しかし、本校の児童は収集した情報をもとに学習してきているものの、その情報を目的や意図に応じて適切に選択し配置して、表現の工夫を行いながら発表資料を作成する力は十分とはいえない。これは、テーマの設定から発表資料作成に至るまでの過程において、構成や記述を修正したり資料を加工したりすることの難しさや時間的な制約などにより、表現の効果の指導が十分行われていなかったことが原因と思われる。

このような状況を改善するためには、自分の考えの根拠となる資料や事例、感想や意見などの記述を配置して全体を構成するコンピュータを用いた教材により発表設計を支援し、発表資料を作成させるなかで目的や意図に応じた効果的な表現を行う能力を育成することが必要であると考えます。

そこで本研究は、目的や意図を効果的に伝える発表資料作成のために、発表設計を支援するコンピュータ教材を開発し授業実践をとおして、書くことの能力を高める指導の在り方を明らかにし、小学校国語科の指導の改善に役立てようとするものである。

研究仮説

小学校国語科の指導において、発表設計を支援するコンピュータ教材を用いれば、発表資料を作成させるなかで児童の書くことの能力を高められるであろう。

研究の内容と方法

1 研究の内容

- (1) 小学校国語科において書くことの能力を高める指導の在り方に関する基本構想の立案
- (2) 基本構想に基づく指導プログラムの作成
- (3) 基本構想に基づくコンピュータ教材の開発
- (4) 授業実践および実践結果の分析と考察
- (5) 小学校国語科において書くことの能力を高める指導の在り方に関する研究のまとめ

2 研究の方法

(1) 文献法 (2) 質問紙法 (3) 授業実践 (4) テスト法

3 授業実践の対象

栗石町立七ツ森小学校 第5学年(男子8名 女子10名 計18名)

研究結果の分析と考察

1 小学校国語科において書くことの高める指導の在り方に関する基本構想

(1) 国語科において書くことの高める指導の基本的な考え方

国語科では、互いの立場や考えを尊重して言語で伝え合う力の育成が求められている。その中で、相手意識や目的意識を明確にもつことが重視されている。このことは、児童自らが何のために、だれに、どんなことを伝えたいかという願いをもつことが、主体的な言語活動への取り組みにつながるためと考える。そのため、日常生活に見られる身近な話題や題材にテーマを見だし、それについて説明や報告、調査、研究などの学習活動を行う場面を設定することは、児童の言語で伝え合う力の育成に重要であると考えられる。

言語には音声言語と文字言語があり、自分の考えを発表する場合、音声言語の役割は大変重要である。しかし、発表にあたって原稿や発表資料が作成されることが多いことから分かるように、文字言語も重要な役割をもち、両者は深いかわりをもつものと考えられる。書くことで自分の発表の内容をより深く見つけ、事例や感想・意見を整理し、必要な表現の工夫や全体の構成など、目的や意図に合ったものになっているかを確認することができる。また、音声だけでは伝わりにくい内容も、収集した情報を取捨選択し発表資料としてまとめて提示することにより、分かりやすく説得力のあるものになる。

【表1】書くことの高める指導の構成要素

相手意識・目的意識	主題について取材や構成、記述、推敲を行うために伝える相手や自分の考えを明確にすること
取材する力	伝える相手や目的に応じて必要な事柄を収集し、適切なものを選んで整理すること
構成する力	伝える相手や目的に応じて表現方法や書く順序、段落相互の関連を考慮して全体の組み立てを行うこと
記述する力	伝える相手や目的に応じて客観的な事実と自分の感想・意見を区別し、構成をもとに表現の工夫をしながら書くこと
推敲する力	伝える相手や目的に応じて主題や取材、構成、記述を見直し、述べたいことが適切に表現され伝えることができているかを判断すること

このように、発表の際に書くことは話すことと同様に自分の考えを他者に伝える重要な役割をもち、国語科において書くことの高めることは伝え合う力の育成につながるものと考えられる。

そこで本研究では、書くことの高める指導について学習指導要領に示された5項目をもとに、構成要素を【表1】のように示す。

また、発表設計について、本研究では「発表者が目的や意図に応じて内容を構想し、テーマの設定や、発表形態の選択、取材した情報や記述を構成した発表資料作成、役割分担など、発表を具体化する作業」ととらえる。

(2) 書くことの高める指導においてコンピュータ教材を用いる意義

自分の考えを表現し伝える学習では、児童に相手意識・目的意識を明確にもって行わせることが活動の意欲を高め継続させるうえで重要である。このことから、発表資料の作成をとおして書くことの高める場合にも取材、構成、記述をするなかで表現の工夫を行い、その効果を確認しながら学習活動ができるよう指導する必要があると考えられる。

発表資料の作成にあたっては、これまでも、構想図をもとに必要な事柄をカードに書いて並べ替

えながら組み立てを確かめたり、模造紙などに資料を配置して記述したりする学習が行われている。しかし、ある程度記述が進んでから構成や記述内容を変更したり、収集した情報を必要な形に加工したりする場合には困難な場合が多いという面がみられた。これらを踏まえ、書くことの能力を高めるために発表設計を支援するコンピュータ教材を次のように考える。

ア 視覚的に効果を確かめながら構成や記述の変更を容易に行うことができ、児童はさまざまなパターンを試しながら見直しができること

イ 取材において重要な情報収集手段の一つとなっているインターネットとの連携を図ることにより、目的に合わせた情報の選択や加工などが容易にできること

ウ 手順を分かりやすく提示し、各グループそれぞれの作成状況に合わせた発表設計を進めることができ、児童は思考の流れを中断せず効率よく作業できること

以上のようなコンピュータのもつ機能を生かした教材を開発し発表設計を支援することにより、発表資料作成をとおして書くことの能力を高めることができると考える。

(3) 書くことの能力を高めるコンピュータ教材を用いた指導の在り方

発表設計を支援するコンピュータ教材を活用し、次のような学習活動を行うなかで児童の書くことの能力を高めたいと考える。

ア 相手意識・目的意識

「子ども環境会議を開こう」では、教材文の学習を基に身近な環境に目を向け、環境を守るために自分たちにできることを学級で提案する。グループごとの提案を行うため、まず共通の相手意識・目的意識をもって発表設計を行わせることが重要であると考えられる。

コンピュータ教材では、まず自分が選んだ環境問題について調べ、分かったことや伝える相手、伝えたいことを各自で整理することにより課題意識を高める。その内容をグループで話し合い、比較検討しながらまとめることにより共通の相手意識・目的意識をもたせることができると考える。

イ 取材する力

児童は、相手意識・目的意識を念頭において自分たちの提案に必要な情報を収集し、そのなかからもっともふさわしいものを選択する。その際、複数の情報を比較し正確さや妥当性について考え、目的に合った収集や加工、整理を行わせる必要がある。取材活動においてインターネットは児童の関心が高く、必要な部分の印刷、図やグラフなどの資料の保存や加工ができるなどの点で効果的な手段であるが、逆に情報量の膨大さから目的の情報を探しにくい面もある。

そこで、目的に応じた確かな情報を得るために、複数の手段を使い分けながら情報収集をする必要性に気付かせる。その上でコンピュータ教材を用い、得られた資料を書きたい事柄と照らし合わせながら選択させることにより、児童の取材する力を高められるものと考えられる。

ウ 構成する力

取材により得られた事実と、それに対する自分の感想・意見の記述について、内容や段落相互のつながりを考えながら全体の組み立てを考える。児童は、伝える相手や目的に応じてどのような構成がよいか試行錯誤を行うことになる。

そこで、コンピュータ教材を活用し、全体の組み立てによる伝わり方の違いを視覚的にとらえながら考え修正していく学習をとおして、構成の大切さに気付き、その力を高められるものと考えられる。

エ 記述する力

文章を書く場合、文末表現を確かめたり段落相互の関係から接続詞を選んだりして、目的に沿ったさまざまな表現の工夫をしながら書き進めることになる。特に書く活動をグループで分担して行う場

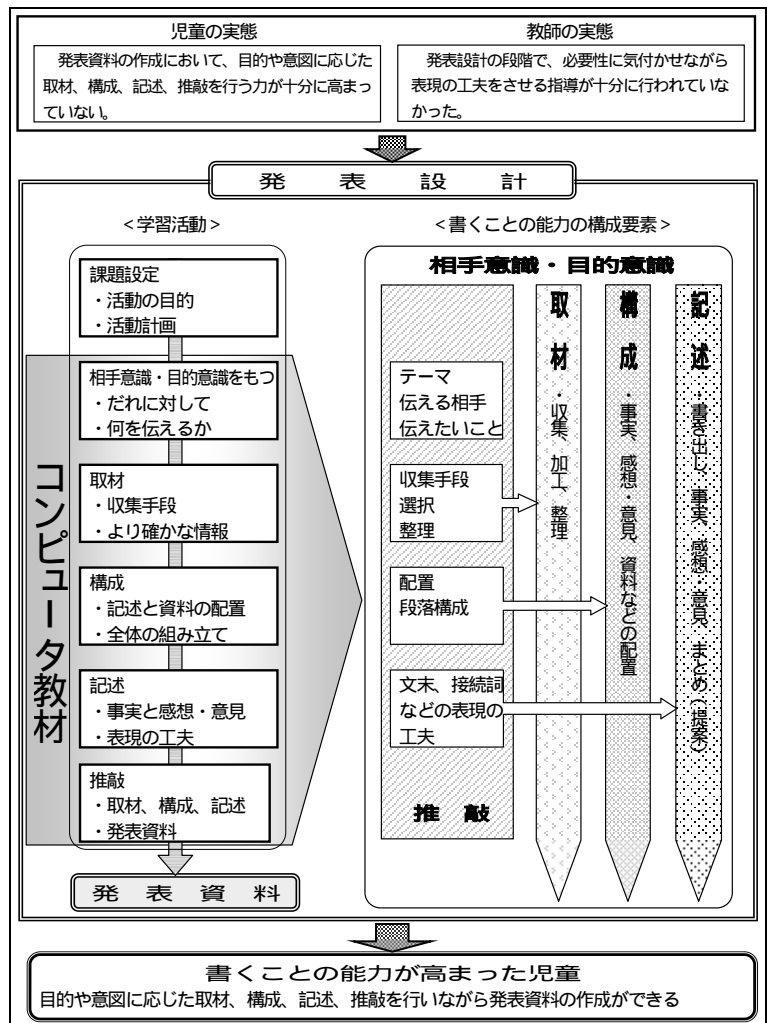
合、各自が書く内容と全体の組み立てをつかんでおくことは非常に大切である。

コンピュータ教材では、発表設計での各段階の記述内容を引き継ぎ、事例や考えの述べ方、問いかけなどの表現の工夫や段落をつなぐ接続詞など、必要に応じてその効果を確認しながら加除修正できる。書く順序や事柄が明確であれば、児童は手書きによる発表資料作成に移っても、スムーズに書き進めることができるものとする。

オ 推敲する力

児童は、発表設計の各段階や作成した発表資料そのものについて見直しを行う。その際には誤字脱字の訂正だけでなく、相手に対して述べたいことが表現され、伝えたいことが伝わるかどうかの見直しであることを意識させて行わせたい。

そこでコンピュータ教材を活用した発表設計では、テーマの設定から発表資料が完成するまでの各段階で、だれに対して何を伝えたいかという意識を前提にくり返し見直しをさせる。こども環境会議の前には、聞き手の意見を参考にした見直しをさせるために作成した発表資料をもとに小グループでの中間発表を行う。これらの見直しを行うことによって推敲



【図1】基本構想図

の目的と観点をとらえさせ、さらにそれらに基づいて推敲する力を高めることができるものとする。

(4) 書くことのできる能力を高めるコンピュータ教材を用いた指導についての基本構想図

書くことのできる能力を高めるコンピュータ教材を用いた指導についての基本構想図を【図1】に示す。

2 基本構想に基づく指導プログラム

基本構想を基に、教育工学的な手法を用いて指導プログラムを作成した。本資料では、単元の指導計画を【表2】に示す。

【表2】単元の指導計画








授業実践は太枠内第4次から第6次までを行った

次	学習の流れ	学習活動	時数
1	・地球環境という視点からわたしたちの生活に目を向け、人類の課題について考えよう	・「一秒が一年をこわす」「ホテルのすむ水辺」「子ども環境会議」を開こうの三教材に目を通し単元のねらいを知る。 ・「一秒が一年をこわす」の全文を読み通す。 ・題名について考え、発表し合う。	1
2	・地球環境の問題をとらえ筆者の考えを読み取る	・三つの意味段落ごとに要点をまとめる。その際、具体的な事例をとらえ、筆者の考えを読み取る。 ・全文の要旨をとらえる。 ・筆者の考えを知り、自分なりの考えをもつ。	2~4 5
3	・筆者の訴えたいことを理解し、自分の生活や身の回りの出来事について考えよう	・「ホテルのすむ水辺」を読み、筆者の意図を探る。 ・筆者の意図をふまえ、自分の生活や身の回りの出来事について考える。	6~7
4	・自分が関心をもった環境問題について調べ、学級の仲間知らせるための発表資料を作る	・「一秒が一年をこわす」「ホテルのすむ水辺」の学習を受け、自分の身の回りにおける環境問題のうち、興味のあるものを選び、調べ学習を始める準備をする。 ・同じ傾向のことを調べようとしている人と、グループを作って調べ学習を行う。 ・「何を、どのような方法で調べた結果、何が分かったか」が伝わるように工夫して資料をまとめる。 ・環境のために提案したい具体的な活動を考える。	8 9~10 11~12
5	・環境について話し合おう	・小グループによる分科会を設定し、出された意見から発表資料を効果的に使った発表の方法を考える。 ・調査の結果を交流し合う中で、今、自分たちの力でも環境を守るためにできることについて、具体的な方法をまとめる。	13 14
6	・より確かな情報を得るため、伝えるためにはどうしたらよいか考えよう	・教科書P.57の内容を読み取る。 ・「子ども環境会議」の際の情報収集や発表の時に気を付けたことを振り返って書く。	15

3 基本構想に基づき開発したコンピュータ教材の内容

基本構想に基づき開発したコンピュータ教材の内容を、教材の段階に従い【資料1】に示す。なお、児童の実態によって教材のもつ機能を選択して実践を行うことができる。

【資料1】基本構想に基づき開発したコンピュータ教材の内容

段階	メニュー 課題の設定	ステップ1 相手意識・目的意識	ステップ2 取材
教材の画面			
内容と児童の活動及び目的	グループの登録 発表資料作成までの学習活動をメニューとして表示	環境問題についての概要調査 提案の構想と取材活動の焦点化 相手意識・目的意識の共通化	情報収集と事例の書き出し 原因や今後予想される状況など 事例の焦点化
段階	ステップ3 取材	ステップ4 構成	ステップ5 取材・構成
教材の画面			
内容と児童の活動及び目的	ステップ2の内容をもとに話し合いによる具体的な提案の確認	書き出しとまとめの文章の構想 事例の内容とその資料の選択 全体の流れの確認と情報収集	必要に応じた画像の加工 トリミング、拡大縮小 スキャナを使った取り込みなど
段階	ステップ6 構成・記述・推敲	ステップ7 構成・記述・推敲	ステップ8 推敲
教材の画面			
内容と児童の活動及び目的	シナリオ（ステップ4）をもとにした表現の工夫	事例に対する感想や意見の追加、修正 提案と根拠となる事例の確認	発表資料の確認（スライドショー） 地球環境会議での発表のイメージ化

本コンピュータ教材は発表資料の作成だけでなく報告文や意見文など、環境問題以外の課題にも必要に応じて活用できるようにしている。また、発表資料作成をとおして書く力を高めることに重点を置いた本研究では、発表設計のすべての時間にコンピュータ教材を用いるのではなく、手書きによる書く活動を行うまでの学習活動に用いるものとする。

4 検証計画

検証計画の概要は【表3】のとおりである。

【表3】検証計画の概要





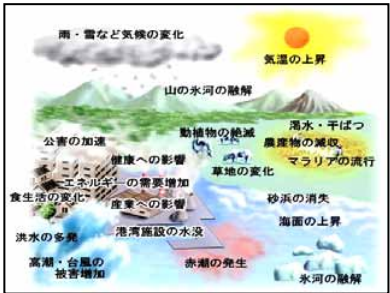

検証項目	検証内容	処理・解釈の方法
1 発表資料作成における書くことについての意識の状況	(1) 相手意識・目的意識	事前・事後テストの結果から t 検定を用いて分析・考察する。 判断基準表から分析・考察する。 児童の感想と記録から分析・考察する。 作成した発表資料をもとに分析・考察する。 質問紙を用いて調査し、分析・考察する。 ² 検定により分析・考察する。
2 発表資料作成による書く力の育成状況	(2) 必要な情報の取材をする力	
	(3) 発表資料として構成する力	
	(4) 効果考えた表現を工夫して記述する力	
	(5) 発表資料を推敲する力	

5 授業実践及び実践結果の分析と考察

(1) 発表設計を支援するコンピュータ教材を用いた授業実践の概要

基本構想に基づいて作成した指導プログラムに従い、授業実践を行った。【資料2】は第4次の取材においてコンピュータ教材を活用した授業実践場面である。

【資料2】コンピュータ教材を活用した授業実践場面

段階	主な学習内容	活動の様子・指導の手だて
導入 10分	1 既習事項の確認	  <p>環境問題について調べる手段、概要、伝える相手、自分たちにできそうなことを記入し、身の回りの環境にも目を向けながら、自分たちにできそうな解決方法を話し合った。次に、教科書の教材文を参考にどんな事柄が発表資料に記述する事例として適当かを確認した。</p>
	2 課題把握	
展開 73分	3 調べる方法の話し合い	   <p>既習の情報収集手段の長所と短所を話し合い、内容によって手段を選ぶことの大切さを確認した。また、同じ事柄であっても複数の手段を用いることの必要性についても話し合った。これらを確認した上で情報収集に取りかかった。</p> <p>引用ホームページ:京と地球(アース)KYO TO EARTH 地球環境問題 http://www.pref.kyoto.jp/intro/21cent/kankyoo/index_j.html</p> <p>視覚に訴える資料として活用できそうな写真やグラフなども印刷したりコンピュータに保存したりしながら収集を行わせた。グループとしてまとめる際には、左図のように情報収集で得られた事実と関連する資料を選択しコンピュータ教材を用いて整理させた。</p>
	4 テーマの話し合いと情報収集	
まとめ 7分	5 書く必要のある事柄と資料の選択と整理	  <p>取材により分かった事実をグループで確かめながら、コンピュータ教材を使って整理した。そして、入力した内容と集めた資料がテーマと一致したのかどうかを確かめた。ステップ2の記入内容はステップ3の画面に引き継がれる。グループで選んだ事例や考えをもとに、どのような提案が可能かを話し合い、発表資料のシナリオを作成することを確認した。</p>
	6 本時のまとめ	
	7 学習の振り返りと次時予告	

(2) 実践結果の分析と考察

ア 発表資料作成における相手意識・目的意識の育成状況

事前と事後の相手意識・目的意識の変容について² 検定を行った結果を【表4】に示す。

この結果、発表の目的を考えた資料作りを行う意識について有意差が認められた。聞く相手を考えた資料作りに対する意識では有意差が認められないが、その原因としてもともと書くことについての意識が高く、(事前・事後)が(+・+)の肯定的な回答が大部分を占めたためと考えられる。

【表4】相手意識・目的意識の育成状況 n = 18

相手意識・目的意識に関する項目	P ₁ \ P ₂	事後			2	有意差
		+	-	合計		
発表の目的を考えた発表資料作りを行おうとしているか。	事前	+	10	0	10	5.14 *
		-	7	1	8	
		合計	17	1	18	
聞く相手を考えた発表資料作りを行おうとしているか。	事前	+	13	0	13	2.25
		-	4	1	5	
		合計	17	1	18	

「注」1 事前調査は9月18日、事後調査は10月17日に実施した。
 2 各調査内容の意識をアイウエの4肢選択で問い、ア・イは+反応でありアはイより強く、ウ・エは-反応でありエはウよりも強い。
 3 *は有意水準5%で有意差が認められたことを示す。
 4 ²検定に用いた公式は次に示すとおりである。

$$\chi^2 = \frac{(b-c)^2}{b+c} \text{ 但し、 } b+c \text{ 10のとき } \chi^2 = \frac{(|b-c|-1)^2}{b+c}$$

b: (-) (+) c: (+) (-)

そこで、発表資料を作成するときの工夫や留意点について質問紙の自由記述から分析してみた。事前の記述ではほとんどの児童が文字表記を挙げたが、具体的にその理由に触れているものはなかった。しかし、事後の記述では「相手に分かりやすいように」「みんなが読みやすいように」など、相手や目的を意識した具体的な記述に変化している。

また、発表資料の作成のなかで児童からは、「この資料のほうが分かりやすい」「提案のところはもっとくわしくした方がいいと思う」など、伝える相手や目的を念頭に置いて活動していると思われる声が聞かれた。

これらのことから、テーマを考える段階にコンピュータ教材を活用し、共通の相手意識・目的意識を念頭に発表設計に取り組みさせたこと、さらに取材や構成の結果を視覚的にとらえさせたことにより、児童は伝える相手や目的を意識した発表資料の作成を行うことができたものとする。

したがって、コンピュータ教材を活用した指導は、書くことについての相手意識・目的意識を高める指導として効果があったものと思われる。

イ 取材する力についての育成状況

発表資料作成における取材について、判断基準に基づいた評価の結果を【表5】に示す。事前の児童数は第4次の第1時に個別に行った情報収集の観察、事後は【資料2】に示した授業実践での観察によるものである。

【表5】の各項目の児童数をみると、事後はいずれも判断基準のAに該当する児童数が増加し、全体数からみた割合も多い。取材活動中の児童からは、コンピュータ教材との連

【表5】取材する力についての判断基準と児童の変容 n = 18

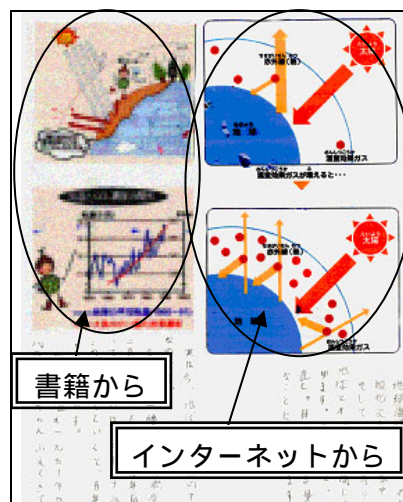
評価項目	評価	判断基準	児童数	
			事前	事後
情報収集手段	A	図書資料、インターネット、インタビューなど、いろいろな方法の中から自分の課題に合った方法を選び、情報を収集している。	1	9
	B	自分の課題について複数の手段を用いて情報を収集している。	10	6
	C	自分の課題に合った手段が見つけれず、特定の手段だけで収集したり、収集に取りかかることができなかつたりしている。	7	3
集材	A	集めた情報を項目ごとに整理し、短い言葉でまとめて書いている。	2	6
	B	集めた情報を整理して、カードに書いている。	11	12
	C	必要な情報を収集することができないため、カードにまとめて書くことができない。	5	0
選材	A	全体を見通して、自分が調べたことの中から書く必要のある事柄や資料を選び整理している。	0	8
	B	課題について自分が調べたことの中から、必要な事柄や資料を整理している。	12	10
	C	必要な資料の判断がつかないため、書く事柄と資料を関連させて整理することができない。	6	0

携を考えるとインターネットによる収集が整理の面からも便利だが、書籍の方が探したい情報がすぐに見つかるという感想が聞かれ、手段を選んで取材を行う様子がみられた。

さらに、実際に作成した発表資料から情報の選択についてみると、児童は【図2】の例のように、双方から収集した図を組み合わせ用いている。また、別の発表資料には、割合をあらわす場合には表よりもグラフの方が一目で分かりやすいという理由から、グラフを選択したというものもあった。したがって、児童は必要な情報を選んで使っていることが分かる。

これらのことから、コンピュータ教材を用いて収集した資料と書きたい事柄と照らし合わせ、目的にあったものを選びながら発表設計を行ったことは取材する力を高めることに有効であったと思われる。

ただ、実践前は児童の実態から情報収集の手段をインターネット、書籍、インタビューの3つを主に想定していたが、実際の収集はインターネットと書籍から行った。取材活動の時間が2時間程度と短く、また、準備期間にも余裕がなかったことから、インタビューへの取り組みが困難であるとの判断があったと思われる。



【図2】作成した発表資料例

ウ 構成する力についての育成状況

構成する力の育成状況について、事前・事後の評価問題から t 検定を行った結果を【表 6】に示す。

この結果から上位群、下位群のいずれにおいても有意差が認められた。

コンピュータ教材を使った構成はグループごとに行っているが、そのなかで「現在の様子が先で原因は後の方がいいと思う」「温暖化の意味だから図と組み合わせの方がいいと思う」など、書く事柄の順序や収集した情報との関連を話し合いながら試行錯誤する場面がみられた。また、まとめの文だから「このように」、反対のことだから「しかし」というように段落の関係を判断して接続詞の選択を行っていた。

さらに、【図 3】に示すようにコンピュータ教材の入力画面と作成した発表資料を比較してみると、コンピュータ教材で見直した構成をもとに文章が配置され、各段落のつながりを考えた接続詞を使いながらまとめられている。これは、児童が全体の構成を理解した上で記述を行うことができたためと思われる。

これらのことから、グループ活動での構成にコンピュータ教材を用い、全体の組み立てによる伝わり方の違いを視覚的にとらえながら考え修正する学習を行うことは、児童の構成する力を高める上で効果があったものと思われる。

エ 記述する力についての育成状況

記述する力の育成状況について事前・事後の評価問題から t 検定を行った結果を【表 7】に示す。

この結果から上位群、下位群のいずれにおいても有意差が認められた。

また、発表資料の記述にコンピュータ教材で確認した表現の工夫を生かしている児童が多く、次ページ【表 8】のように A の判断基準に該当すると考えられる児童数は全体の半数という結果であった。

発表資料にまとめる段階はコンピュータ教材を離れ、手書きによる作成を行っている。しかも、一人がすべてを書くのではなく、段落ごとに分担して記述を行い、そ

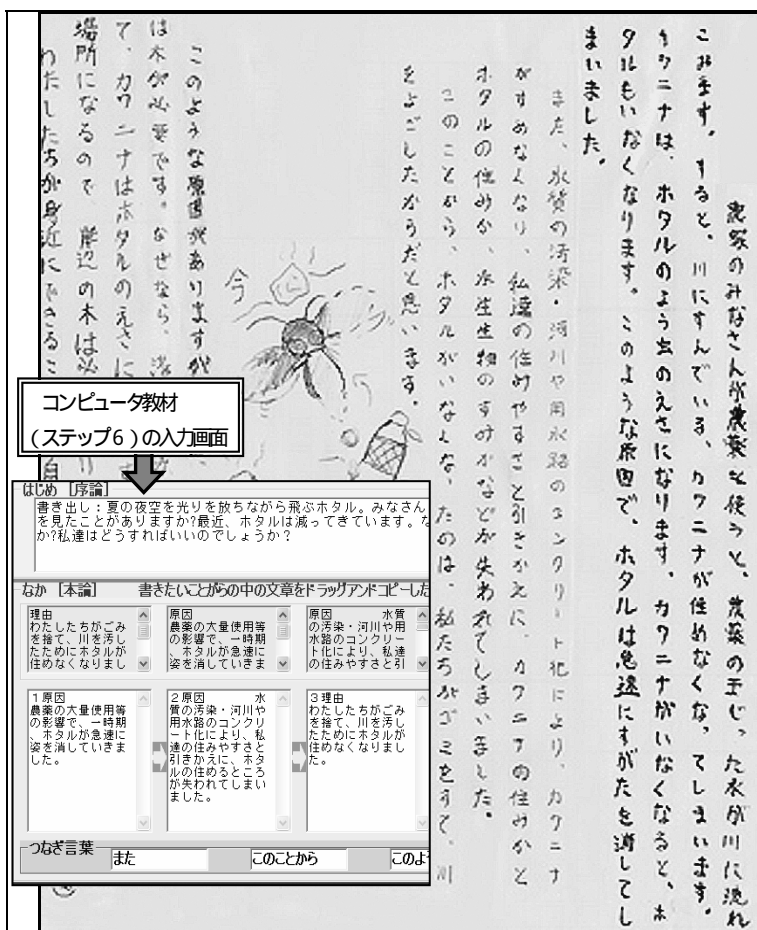
【表 6】構成する力の変容状況 n = 18

		平均点	標準偏差	相関係数	t 値	有意差
全体 18 名	事前	55.6	14.6	0.36	5.61	*
	事後	78.9	15.7			
上位群 9 名	事前	64.4	10.1	0.84	6.03	*
	事後	82.2	14.8			
下位群 9 名	事前	46.7	13.2	-0.08	3.71	*
	事後	75.6	16.7			

「注」 1 昨年度の標準学力検査から上位群と下位群をわけている。
 2 事前テストは9月18日、事後テストは10月21日に実施した。
 3 *印は t 検定において有意水準 5% で有意差があることを示す。
 4 t 検定に用いた公式は次に示すとおりである。

$$t = \frac{\bar{X}_2 - \bar{X}_1}{\sqrt{\frac{S_1^2 + S_2^2 - 2rS_1S_2}{n-1}}}$$

\bar{X}_1, \bar{X}_2 : 事前、事後テストの平均点
 S_1, S_2 : 事前、事後テストの標準偏差
 r : 相関係数 n : 人数



【図 3】コンピュータ教材による構成と実際の発表資料（抜粋）

【表 7】記述する力の変容状況 n = 18

		平均点	標準偏差	相関係数	t 値	有意差
全体 18 名	事前	45.6	21.7	0.45	8.37	*
	事後	85.6	13.2			
上位群 9 名	事前	54.4	17.8	-0.20	5.26	*
	事後	92.8	7.5			
下位群 9 名	事前	36.7	22.5	0.49	5.94	*
	事後	78.3	13.9			

「注」 表 5 に同じ

れを構成に従って再度つながりを確認しながらまとめる方法で行っている。書く内容はそれぞれ異なるが、ほとんどの児童は自分が何についての文章をどのように書けばよいのかを理解しており、段落のつながりに合った接続詞や文末表現の工夫を使いながら書き進めることができていた。

児童は、発表設計にコンピュータ教材を活用し、目的に応じた取材や構成の見直し、表現の工夫などを行いながら、段落をつなぐ接続詞や文末表現が受け手に与える印象の違いを確かめてきている。そのため、情報収集の目的や構成、表現の工夫の効果を確かめながら方法と必要性を理解し、発表資料の記述に生かすことができたと考えられる。

オ 推敲する力についての育成状況

発表資料作成前と後の児童の推敲の観点の変化について【表9】に示す。

【表9】の児童の推敲の観点の変化をみると、事前段階では文字表記の見直しが大部分であった。事後段階になると推敲の観点が増え、その内容も取材や表現の工夫、作成手順に関するものを挙げる児童が多くなっている。

さらに、【表10】の児童の感想に「文末の表現」「文章に合うような写真」「見ている人が楽しく」など具体的な観点を挙げて自他の発表資料を評価する記述がみられる。

推敲は完成した発表資料だけでなく、作成までの各段階にも行っている。それぞれの学習のなかで児童は、コンピュータ教材の画面や印刷したものを使って、伝える相手や目的に照らしながら作業したり話し合ったりしながら判断する様子が見られた。

これらのことから、発表設計の各段階でコンピュータ教材を活用し、だれに対して何を伝えたいかという意識を前提にくり返し見直しをさせた結果、構成や表現の工夫の効果を理解し、発表資料の作成における推敲に関する意識が高まったと思われる。

6 小学校国語科において書くことの高める指導の在り方のまとめ

小学校国語科において書くことの高める指導の在り方について、基本構想に基づく授業実践及び実践結果の分析と考察から、成果と課題の2点についてまとめる。

(1) 成果

ア テーマ設定にコンピュータ教材を活用し、伝える相手や目的、伝えたいことを明確にしたことにより、児童は共通の相手意識・目的意識に基づいた取材、構成、記述、推敲を行うことができた。

イ コンピュータ教材を用いて記述と関連する資料を照らしながら発表設計を行ったことにより、児童は目的にあった情報の収集や選択の必要性を理解し、取材する力を高めることができた。

ウ コンピュータ教材を用いて書く事柄の順序や収集した情報との関連、段落相互の関係などを視覚的にとらえさせながら構成を行ったことにより、児童は全体の組み立てや述べる順序によ

【表8】記述する力に関する判断基準と該当児童数 n = 18

評価項目	評価	判断基準	児童数
発表資料での記述	A	聞き手にうまく伝わる表現方法を考え最も効果的な表現の工夫をしながら発表資料の記述を行っている。	9
	B	聞き手に分かりやすい効果的な表現を工夫して発表資料の記述を行っている。	9
	C	聞き手にうまく伝わる表現の工夫をすることができず、方法を1～2説明し選択させる必要がある。	0

【表9】児童の推敲の観点の変化 n = 17

順位	事前		事後	
	項目	数	項目	数
1	習った字を使っているか	6	図やグラフの使い方は分かりやすいか	8
2	字をていねいに書いているか	4	読みやすいように字をていねいに書いているか	6
3	特に伝えたいことを線や記号で強調しているか	3	発表資料の作成手順は合っているか	4
4	自分の気持ちを入れているか	2	文末などの表現の工夫をしているか	3
5	誤字・脱字がないか	1	誤字・脱字がないか	2
6	未記入	4	習った字を使っているか	1

「注」 複数回答のため合計の人数と学級的人数は一致していない。

【表10】発表資料についての児童の感想

児童名	感想
T	分かりやすい絵を使ったり、文末の表現を工夫したりできたので良かったです。
S	写真を大きくしたり、その文章に合うような写真を貼ったりした。もう少し詳しく書いてやりたかった。
U	見ている人が楽しくなるようにとところどころにホルルの写真を貼ったのはいいと思った。けれど、絵を描きすぎたので次回は絵を減らしたい。

る伝わり方の違いや構成の大切さを理解し、その力を高めることができた。

エ 発表設計の各段階で事例や考えの述べ方、問いかけなどの表現の工夫や段落をつなぐ接続詞など、コンピュータ教材を用いてその効果確かめながら加除修正させた。これにより、児童は書く順序や事柄を明確にし、表現方法を工夫しながら発表資料を書き進めることができたことから、記述する力を高めることにコンピュータ教材を用いた指導は有効であった。

オ 発表設計では、コンピュータ教材を活用しテーマの設定から発表資料が完成するまで、だれに対して何を伝えたいかという意識を前提にした見直しを行わせたことにより、児童の推敲の目的や観点を広げ、さらにそれらに基づいて推敲を行う力を高めることができた。

(2) 課題

授業実践では児童の取材活動がインターネットと書籍に限定されてしまった。ほかの情報収集の手段をそれぞれの特性に応じて使い分けるなかで、より確かな情報を得るという意識を高める必要がある。

以上のことから、コンピュータ教材の活用によって相手意識・目的意識と取材、構成、記述、推敲それぞれの力を高めることができたと考える。したがって、小学校国語科において書くことの能力を高める指導に、発表設計を支援するコンピュータ教材を活用することは、有効な手だての一つであると考えられる。

研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

この研究は、目的や意図を明確にもって書く場面を設定し、情報活用のおして自らの考えを深めさせ、さらに表現の工夫をさせることによって書くことの能力を高める指導の在り方を明らかにし、小学校国語科の指導の改善に役立てようとするものである。

そのため、「書くこと」の指導事項を基に書くことの能力について検討を行い、基本構想を立案した。さらに、表現の工夫を行いながら目的や意図に応じた発表資料を作成できるコンピュータ教材を開発し、指導プログラムに基づく授業実践をおして発表設計の支援への有効性を検討した。その結果、小学校国語科における書くことの能力を高める指導の在り方をまとめることができた。

2 今後の課題

児童はコンピュータに対して関心が高く、その活用を工夫することによって学習効果を高めることができるものとする。そこで、コンピュータを一つの選択肢として位置づけ、国語科の指導において効果的な教材の開発とその活用場面を探りながら書くことの能力を高めていきたいと考える。

【参考文献】

- 授業技法研究会編 「授業研究双書 1 指導プログラムの理論と作成()」 才能開発研究財団 1986年
授業技法研究会編 「授業研究双書 2 指導プログラムの理論と作成()」 才能開発研究財団 1986年
田中博之・木原俊行・山内祐平著 「21世紀を創る子どもと学校教育1
新しい情報教育を創造する - 7歳からのマルチメディア教育 - 」 ミネルヴァ書房 1996年
無藤隆編著 「新学習指導要領早わかり全教科改訂のポイント 小学校編」 東京書籍 1999年
笠原一浩・山本美孝・山崎秀著 「VisualBasic.NET 入門 活用編」 ソフトバンクパブリッシング株式会社 2002年